

HEAD

(岩倉紙芝居館古典館 <http://hjueda.on.coocan.jp/koten/koten.htm>)

岩倉紙芝居 古典館 宰主 上田啓之

三年問第三十八

礼記 新釈漢文大系 明治書院 竹内照夫著 礼記、下卷、三年問第三十八を読む。父母に対する三年の喪について種々問答することを内容として、「三年の喪に関する問答」を略して「三年問」と題する。「荀子」の「礼論篇」中の、三年の喪を論ずる一段にほぼ同じく、出所は一つであろう、と注される。荀子（前313? - 238?）は戦国時代末、斉の襄王に仕え、稷下の学の祭酒（学長職）を務め、後、讒言のため楚に去り、宰相春申君に用いられて、蘭陵の令となったとされる。その頃には、このテキストが流布していたことになる。フォントの問題で下線部はテキストと字が異なっている。

三年之喪何也 曰、稱情而立文、因以飾羣、別親疏貴踐之節、而弗可損益也。故曰、無易之道也。創鉅者其日久、痛甚者其愈遲、三年者、稱情而立文、所以為至痛極也。斬衰、苴杖、居倚廬、食粥、寢苫、枕塊、所以為至痛飾也。三年之喪、二十五月而畢、哀痛未盡、思慕未忘、然而服以是斷之者、豈不送死有已、復生有節也哉。

三年の喪とは何ぞや。曰く、情を稱（はか）りて文を立て、因りて以て羣を飾（きよ）め、親疏貴踐（しんそきせん）の節を別ちて、損益す可からざるなり。故に曰く、無易の道なりと。創（きず）鉅（おほい）なるは、其の日久（ひさ）しく、痛（いたみ）甚（はなはだ）しきは其の愈（い）ゆること遅し。三年は、情を稱りて文を立つ。至痛の極を為（おさ）むる所以（ゆゑん）なり。斬衰（ざんさい）し、苴杖（しよぢやう）し、倚廬（いろ）に居り、粥（かゆ）を食（くら）ひ、苫（とま）に寝ね、塊（つちくれ）を枕とするは、至痛の飾（きよめ）と為（な）す所以なり。三年の喪は、二十五月（にじふごげつ）にして畢（をは）る。哀痛未だ盡（つ）きず、思慕未だ忘れず、然り而して服すを是を以て之を斷（た）つは、豈（あに）死を送ること、已（や）むこと有りて、生に復（かへ）る節（せつ）有らざらんや。

三年の喪とは何のことでしょう。曰く、人の情を計り、そのありようを定めたもの。よりにて、その集団を清めんとするも、人の関係の親疏、貴踐による違ひをそれぞれ分かつものにて、それ以上それ以下のものにあらず。故に、無易の道と曰（い）ふ。大きな矢傷、刀傷を受ければ、長きにわたりて痛みは甚だしく、遅々として傷は癒へることがない。三年といふは、人の情を計り、そのありよ

うを定めるもの、痛みの極みを癒すためのものにより。目の粗ひ麻布で作られた喪服をまとい、黒き竹の杖によりかかり、服喪の仮のいおりに居り、粥を食ひ、すげやかやで編んだむしろに寝ね、土を固めて枕とするは、このうえなき痛みを清めるためのもの。三年の喪は、二十五ヶ月にして終はる。しかし、哀痛はそれに盡くるものでなく、思慕もそれにて忘れらるるものにあらず。さようであるも、喪に服すをここで止(や)むといふは、死を送るを止め、生に復す節があるにやあらん。

■ 稱は稱声、稱(称:しょう)の重りを称(あ)げている姿、もと禾穀の重さをはかることを示す字、説文に「銓(はかる)なり」とみえる(字統)。

■ 立、ものをはじめめることを立案、立法、立制、意見を述べることを立言、立論、人格・信条の基調を確立することを立德、立命とする。立文の文は人文、文化の文(字統)。稱情而立文は、人の情、この場合には父母を失った痛みを称(はか)り、その癒し方、過ごし方を定めること。

■ 飾、周礼、封人、「その牛牲を飾(ぬぐ)ふ」とあり、注に、「刷治してこれを潔清する。」とあり清める意。巾をもって刷(は)らう(字統)。

■ 節、竹の節、節の分かれ目、節度のこと。古くは竹の節に定めを記すことがあった。

■ 弗可損益、引く(減らす)ことも足す(増す)こともない。

■ 無易之道、易は変えることであり、変わることはない道。

■ 創は創傷と創始の二義ありとされるが、創は創傷、創始の正字は勑、井は鑄型、鑄型を裂いて器を取り出すことから勑始、勑作の意となる(字統)。

■ 鉅、巨が音で剛強の意の語源(強)から来ており、巨に通用する。おおきいこと(角川漢和中辞典:以下角中辞)。

■ 斬衰の斬は布を切っただけで縫いつけていないこと、衰は喪服の義、布目の粗い麻布で作った喪服で重い。重く痛む心に纏う衣服。

■ 苴は草木が枯れ落ちて水上に浮かぶもの。苴杖は喪中の用いる黒い色の竹の杖(角中辞)。痛みを支える杖。

■ 倚廬は、父母の喪に服するあいだに住む仮のいおり(角中辞)。倚はよりかかる、廬はこの場合、墓室を象ったもの。

■ 苫は、すげやかやなどで編んだ造ったむしろ。葬儀のときに喪主が敷いて寝るもの(角中辞)。

■ 塊は土のかたまり、土を固めて作った枕。

■ 畢は鳥獸を捕える網で長い柄のついた象形、獵において畢でとり尽くす、畢尽、畢終の意となる(字統)。痛みをとり尽くす、痛みが終わる義であるが、尽きないと続く。それでも喪を止めるのは、日常生活に戻る節目というものがあるからとする。

凡生天地之間者、有血氣之屬、必有知。有知之屬、莫不知愛其類。今是大鳥獸、則失喪其羣匹、越月逾時焉、則必反巡、過其故郷、翔回焉、鳴號焉、躑躅焉、踟躕焉、然後乃能去之。小者至於燕雀、猶有啁噍之頃焉、然後乃能去之。故有血氣之屬者、莫知於人、故人於其親也、至死不窮。將由夫患邪淫之人與、則彼朝死而夕忘之、然而從之、則是曾鳥獸之不若也、夫焉能相與羣居而不亂乎。

凡（およ）そ天地の間（あいだ）に生ずる者、血氣有るの屬（たぐひ）、必ず知有り。知有るの屬、其の類（るゐ）を愛（めぐ）むこと知らざる莫し。今、是れ大鳥獸、則ち其の羣匹（ぐんひつ）を失喪（しつさう）すれば、月を越へ時を逾（こ）へん。則ち必ず反巡（はんじゅん）し、其の故郷を過ぎ、翔回（しょうくわい）せん。鳴號（めいがう）せん。蹢躅（てきちよく）せん。踟躕（ちちう）せん。然る後に乃ち能く之を去る。小なる者燕雀（えんじゃく）に至り、猶啁噍（しうしう）の頃（けい）有らん。然る後に乃ち能く之を去る。故に血氣の屬有る者、人より知ること莫し。故に人其の親に於けるや、死に至るに窮（つ）きず。將に夫（か）の邪淫（じゃいん）に患（わずら）ふの人に由（よ）らんとすか。則ち彼は朝に死して夕べに之を忘る。然り而して之に従ふ。則ち是れ曾（かつ）て鳥獸に若（しか）ざるなり。夫れ焉ぞ能く相與（あひとも）に羣居（ぐんきよ）して亂れずや。

凡そ天地の間に生ずる者にて、血氣の有る屬は、必ず知有り。知の有る屬、其の類を愛することを知らぬものは莫い。今、是れ大きな鳥獸、其の羣（むれ）の匹（ともがら）を失ひ喪（なく）さば、月を越へ時を逾へてその痛みを癒さんとしよう。すなはち、必ず、巡（めぐ）り反（か）へり、其の故郷を過ぐれば、上空を翔（と）び回（まは）はり、鳴き號（さけ）ぼう。行きつ戻りつしよう。ためらひて行き悩もう。さして後、ようやく去ることができよう。小さきものは燕（つばめ）や雀（すずめ）に至るも、猶、首を垂れて鳴きさえずらん。さして後、ようやく去ることができよう。故に血氣の有る屬は、人ほどその痛みを知るものはなく、故に、人は其の親においてや、死に至るも痛みが尽きることはない。しかるに、邪（やま）しきこと淫（みだら）なこと心奪はれたる人はいかに？彼は朝に親が死すとも夕べにはそれを忘れん。もし、さようだとしてこれに従ふなら、是れ、鳥獸にも及ばぬ、どうしてお互い一緒に暮らして亂れぬことがあろうか。

■ 屬は尾と蜀からなり、尾は獸の牝、蜀は獸の牡器、屬は牝牡の相連なること（字統）。交尾により生まれる動物のこと。■ 羣匹、羣れの匹（ともがら）であるが、羣をともがら匹を連れ合いとすと注されている。仲間を失ったり連れ合いを喪（な）くしたりすれば、と積されている。

■ 蹢躅は、行きつ戻りつすること、zhízhúで躊躇（ちゅうちよ）して進まないこと。踟躕 chíchúも躊躇することだが行き悩むこと、ためらってゆくべきか決まらないこと。■ 啁噍 zhōujiūは、ともに鳥の鳴き声、啁はやかましい、かまびすしい、噍は、かむことであるが、チュチュと鳴くこと、楽しげに鳴くことでもある。啁噍は悲しげに鳴くことと注されている。これは啁噍之頃、頃は稽首のこと、首を垂れて鳴くことからきているのであろう。■ 至死不窮 死に至るまで窮（きわま）らず、生涯消えることのないと積される。窮は穴に身をかかめる象形、物事の奥底までたずねきわめる、つきる、おわる、ふさぐ義。■ 將由夫患邪淫之人與、將由・・・與、まさに～に由らんとするか。患邪淫之人は邪淫に心を患（わずら）ふ人。■ 是曾鳥獸之不若也は

不曾若鳥獸の變形、曾は～することができる、鳥獸にも若くできない。

將由夫修飾之君子與、則三年之喪、二十五月而畢。若駟之過隙、然而遂之、則是無窮也。故先王焉為之立中制節、壹使足以成文理、則釋之矣。然則何以至期也、曰、至親以期斷。是何也。曰、天地則已易矣、四時則已變矣、其在天地之中者、莫不更始焉、以是象之也。然則何以三年也。曰、加隆焉爾也。焉使倍之、故再期也。

將(まさ)に夫(か)の修飾(しゅうしょく)の君子に由(よ)るか。則ち三年の喪、二十五月にして畢(をは)る。駟(し)の隙(げき)を過(す)ぐるが若(ごと)し。然(しか)り而(しか)して之を遂(と)ぐれば、則ち是れ窮(つき)ること無きなり。故に先王(せんおう)、焉(いづく)んぞ之が為に中を立て節(せつ)を制(せい)し、壹(いつ)に以て文理(ぶんり)を成(な)すに足らしめ、則ち之を釋(お)かんや。然らば則ち何を以て期に至るや。曰く、至親(ししん)は期(き)を以て斷(た)つ。是れ何ぞや。曰く、天地は則ち已(すで)に易(あらた)む。四時(しいじ)則ち已に變ず。其の天地の中に在る者、更始(かうし)せざる莫し。是を以て之を象(かたど)る。然らば則ち何を以て三年となる。曰く、加隆(かりう)して爾(しか)るなり。焉(ここ)に之を倍(ばい)せしむ、故に再期(さいき)するなり。

夫(か)の礼樂によりその身を保つ君子ならいかに。三年の喪は、二十五ヶ月にして終はるも、隙間を四頭立ての馬車が走り過ぐるがごときにて、さよう(痛みが尽きぬ)として喪を続けることになれば、尽きることなし。故に、どうして、先王がこのために、ほどよきところを執りて節目とし、いつに物事の筋目をたてて、とりまとめぬことがあろうか。さようであるならば、何故、期(一年)となりましょう? 曰く、近親の喪は一年でおわる。これはどうしてでしょう? 曰く、天地は一年で改まるもの。四季も一年ですでに変はるもの。天地の中に在る者は、一年で改まり新しく始まらぬものはない。これをもて、さようとしたのである。では、何をもて三年となすのでしょうか。曰く、のばすことをよしとせん。すなはち、二倍にせしめん。故に再期となり。

■ 修飾の修は、攸と多からなり、攸は人の後ろから水をかけて洗う形で沐(もく)する意。いわゆるみそぎ、みそぎをして身を清め、その清らかさを示す多を加える(字統)。修飾之君子は、この場合、礼樂を以て身を保つ君子の義。■ 駟は馬四頭で引く馬車。隙は門の隙間のごときもの。■ 遂は、獸を用いて、行為を継続するかどうか、その吉凶などをトし、継続することが決すると、行為は継続され遂行される(字統)。ここでは喪を続けること。■ 中は三軍(左中右)の中軍に立てる吹き流し、卜辞に、「中に立(のぞ)まんか」とは元帥をえらび任命するこ

とか(字統)とある。論語、堯曰篇1)に「執其中」とあり、帝位につくこと。ここでは、中庸を定めること。■ 制は未と刀、未は枝の茂る様、それを切りそろえる、あるいは木を切りそろえる(字統)、製材が原義。制節は節目を定めること。■ 壹は壺の中のものが醗酵して、中に満ちる状態が原義、孟子、公孫丑、上に、「志壹ならば則ち氣を動かし、氣壹ならば則ち志を動かす」とある。ここでは専心すること、もっぱらの義。■ 文理は天文地理とあるごとく、文は天文、人文、天の意や人の心のあや、そこから天意、人意をおしはかる。理は玉を理(おさ)める、木理は木の木目、人の肌を肌理といい、地表の姿が地理、そのすじみちに合わせて治める。文理は物事の筋道。■ 釋は、采(べん)と畢(えき)からなり、采は獸爪、畢は獸屍。獸爪をもって獸屍を裂く、獸屍を分解することから解釈となる(字統)。釋之はうまくとりまとめること。喪明けとすると釈すむきもある。■ 期は一年のこと。■ 至親は近親のこと。■ 更始、更は改、変と通じ、更始はふるいものを改めて新しく始めること。■ 以是象之、以是は天地が一年で改むること、象之は一年の喪としたこと。■ 加隆、隆は高いこと、豊かなこと、加隆はさらに高く、さらに豊かにすること。ここでは、一年に更に年を加えること。■ 加隆焉、焉は状態を表し、爾は然と同じ。焉使倍之の焉は、そこで、すなわち。■ 再期、一年に一年を加える。二十四、二十五月に近い。

由九月以下何也。曰、焉使弗及也。故三年以為隆、緦小功以為殺、期九月以為閒。上取象於天、下取法於地、中取則於人、人之所以群居和壹之理盡矣。故三年之喪、人道之至文者也、夫是之謂至隆。是百王之所同、古今之所壹也、未有知其所由來者也。孔子曰、「子生三年、然後免於父母之懷、夫三年之喪、天下之達喪也。」

九月(きうげつ)由(よ)り以下とは何んぞ。曰く、焉(ここ)に及ばざらしむるなり。故に、三年以て隆(りう)と為し、緦(し)小功(せうこう)以て殺(さい)と為し、期九月を以て閒(あひだ)と為す。上(かみ)は象(しょう)を天に取り、下(しも)は法(はふ)を地に取り、中(なか)は則(そく)を人を取る。人の群居和壹(わいつ)なる所以(ゆゑん)の理(り)盡(つ)くす。故に、三年の喪は、人道の至文なる者なり。夫れ是を之至隆と謂ふ。是れ百王(ひやくわう)の同じくする所、古今の壹(いつ)とする所なり。未だ其の由り來る所を知る者有らず。孔子の曰はく、「子生れて三年、然る後に父母の懷(ふところ)を免(はな)る、夫れ三年の喪、天下の達喪(たつさう)なり。」

九ヶ月より以下の喪とはいかなることでしょう。曰く、焉に及ばぬようにせしむるなり。故に三年をもて隆とす。緦(三カ月の喪)や小功(五カ月の喪)を殺とし、期(一年の喪)と九月(九カ月の喪)を閒とす。上は天により日月星辰の運行より時を受く、下は地により地勢による産物を受く、中は人により社

会生活の約束事を交はす。人が群居して和壹する所以の理を盡くす。故に、三年の喪は、人道の至文なるものなり。そはこれを至隆と謂ひ、是れはすべての王の同じうする所、古今、壹とする所にあるも、未だその由り来たる所を知る者はない。孔子の曰はく、“子、生まれて三年、然る後に父母の懷より離るる。かの三年の喪、天下の達喪なり。”

■ 焉使弗及也、焉は一年、一年に及ばぬようにせしむる。■ 總は總麻（しま）、麻布の目の粗いもので三カ月の喪服。小功は五カ月の喪服。殺は減少、隆が一番長く、殺が一番短く、期と九カ月がその間となる。■ 史記、三皇五帝、庖羲に、「仰ぎては象を天に觀、俯しては法を地に觀、あまねく鳥獸の文と地の宜とを觀、近くこれを身に取り、遠くこれを物に取り、始めて八卦を画し、神明の徳に通じ、万物の情を類す。」とある。象とは日月星辰が示す現象、天意の現れ。法は地勢のこと。則是貝とリからなるが、鼎とリが正字、契約事項を銘文として鼎に刻すること。取は古くは取、与の両義があった。上取象於天、下取法於地、中取則於人、日月星辰の運行から物事を為す時を得る。その地勢から生まれ出づる万物により生活の糧を得る。その中で人は約束事に従って社会を営む。後にいう天の時、地の利、人の和と積す。天の時、地の利、人の和を尽くしたものが三年の喪とつながるが、未有其所由來者也としている。■ 和壹の壹はひとつ、和して一つになること。■ 未有其所由來者也 未だその由り来る所を知る者はない。孔子は、子は生まれて三年父母の懷に抱かれて育つ、父母の死に、哀痛未盡、思慕未忘は、この恩愛三年を由来とするが、それとて確固たるものではない。

平成 21 年 10 月 24 日